

60周年で思い新たに

ダクティル異形管工業会総会

日本ダクティル異形管工業会は8日、第62回定時総会を開くことでも、設立60周年記念行事として講演会を開催した。総会では今年度の事業計画・予算などを決議し、引き続き会員各社の品質管理向上に取り組みむことも、コロナ禍で制約を受けてきた講演会・見学会などを実施していくこととした。講演会では、経済産業省の金属技術室から講師を招き、鉄鋼分野における脱炭素化の現状と課題、方向性などを共有した。

品質管理向上の取り組み また同日付で、令和2年としては、昨年度は標準に作成した「異形管デキ書のうち「粉体塗装の手直し標準」の動画化や「測定機器の測定手順標準」ノギス及びマイクロメータ」の作成などに取り組み、いずれも今年4月1日付で制定した。



記念行事として講演会を開催

そのほか、昨年度中は開催を見送った技術委員会主催の研修会、広報委員会主催の講演会・見学会を今年度は実施する予定。会員会社の要請に基づくと出前教室にも対応していく。

冒頭であいさつした村瀬充会長（村瀬鉄工所代表取締役社長）は、工業会の歴史に触れな



村瀬会長

がら、2000年のピーク時と比べて出荷量が4割以下まで減少していることと言及。原材料の高騰や人手難、円踏ん張って供給体制を維持しなればならない」と力を込め、他団体と連携した需要喚起や会員への責任を考えると、

の情報提供に取り組んでいくとした。

また、長年にわたる工業会活動への貢献を称え、野々山浩一氏（クロダイト薬）と高松秀樹氏（栗本鐵工所）に感謝状と記念品を贈呈した。

◇ ◇

今年以前は前身の水道用鑄鉄異形管工業会が設立された昭和37年から60年目にあたる。総会後の記念講演会では、経産省製造産業局金属課金属技術室の大竹真貴室長が「グリン成長戦略と鉄鋼分野における脱炭素化に向けた取り組み」をテーマに講演。自動車やトランス（変圧器）などを含めた国内の鉄鋼業によるCO₂排出量は産業界の40%、全体の14%を占めており、削減が喫緊の課題だとした。2050年カーボンニュートラルに向けては、徹底した省エネに加え、脱炭素エネルギーの導入拡大による「熱需要や製造プロセスそのものの脱炭素化」が必要だと指摘。相談窓口や補助金など、経産省が提供する支援策を紹介した。その後の懇親会では、会員各社の協力のもと作成したスライドショーを上映。内容は60年のあゆみを振り返るもので、出席者は先達の功績にそれぞれ思いを馳せていた。